

東京バッハ合唱団 月報

[第 743 号] 2024 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.743

May 2024

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

「キラキラ星変奏曲 Version2.0」について

松尾 茂春 (団員、当作品の作曲者)

◆作曲にいたる背景と経緯

バッハの音楽に魅せられて、聴き、奏で、楽譜を眺めるようになってほどなく、私が特に惹かれたのはコラールでのハーモニーの豊かさ、深さ、フーガを始めとするポリフォニックな曲の構造の精緻さ、壮大さでした。

コラールの、素朴な旋律線と多彩で豊かな和音の組み合わせ、全声部に至る歌唱的な連結の見事さに驚き、自分でも試してみようと思った時に最初に思いついたのは「キラキラ星」です。ほとんどの人が知っていると同時に、平易であるがゆえに多様な和声を付与しやすいメロディー - その意味で現代のコラールともいえるこの旋律を素材に、バス・パートが闊達に動き、1、2 拍ごとに和音に変化する形で和声付を試みたのは学生時代かその直後ごろかと思いますが、これが本変奏曲での主題の提示と再現時の原型になっています。

また、テーマの模倣を伴う多声部での展開はパズル的な要素も加わって面白く、授業と授業の間の空き時間に友人の名前のスペルを音名にした主題に基づくフーガ作りを楽しんだり、その後、創作讃美歌の募集に対して、下方 5 度カノンの形で応募したこともありました。この時の経験が、本変奏曲にある 2 曲のフーガ、4 種類のカノン、2 つのフゲッタなどに活かされています。

昔、我が家の子どもが幼少の時、ヴァイオリンを習

い始めて約 1 ヶ月後に発表会の時期が来て、弾ける唯一の曲「きらきら星」で出ざるを得なかったのですが、既成の伴奏譜には飽き足らず、急遽数種類の伴奏を考えて、自家製「きらきら星変奏曲」として演奏することがありました。これが本変奏曲のルーツとなり、この時のシンプルな数曲は多少手を加えて本変奏曲に継承されています。

その後、東京バッハ合唱団で多くのバッハ作品と出会い、大村恵美子先生による訳詞での長年にわたるカンタータ演奏、海外公演、ゼミナールを含む多くの学びの機会を経たある時、先のミニ変奏曲をベースに聖書に基づく歌詞による合唱曲を思いつきました。書き始めると、変奏の切り口について様々なアイデアが湧いてきて、それぞれを曲にするうちに、いつの間にか 41 の変奏、主題の提示と再現を含めて 43 曲の「歌う変奏曲」になっていました。1230 小節、70 分余りを要し、技術的にも至難なこの曲の演奏は現実離れしたことでしたが、大村恵美子先生によるご提案、団員の皆様、共演いただける皆様の理解とお力添えにより、この曲の全曲演奏が実現へと進められていることを感謝しています。

◆変奏の切り口

変奏曲といえば、主題提示時のハーモニーをおおむね継承しつつ、原旋律を主に最上声部でリズム的に変化、展開していくパターンのもものが多くありますが、本変奏曲ではむしろ次に示す様々な切り口から変化を加えています。

主題の声部の位置：ソプラノに限らず、アルト、テノール、バスそれぞれに主題を位置づけた変奏。フーガなどではもちろんすべてのパートに主題が巡って来ます。

旋法：日頃慣れ親しんだ長調、短調に加えて、ドリリア調、フリギア調、ミクソリディア調。

拍子：2/2、4/2、3/4、4/4、6/4、3/8、6/8、9/8、12/8 および素数 2、3、5、7、11 による変拍子。

バッハと仲間の音楽会

6/8 荻窪教会 14 時、6/15 三崎町教会 14 時

< 曲目 >

- **キラキラ星変奏曲 Version 2.0** “初演”
作詞作曲：松尾茂春 (東京バッハ合唱団員)
- **ヴァイオリン、フルート、オーボエのための協奏曲**
BWV 1064
- **カンタータ第 6 番《とどまれ我らと 夕闇せまり》BWV 6**
バッハ・カンタータ日本語演奏：大村恵美子訳詞
< 演奏 >

独唱：藤原優花 (ソプラノ)、中島麻紀子 (アルト)
野中裕太 (テノール)、及川泰生 (バス)
管弦楽：ARS (コレギウム・アルモニア・スペリオレ・ジャパン)、オルガン：田尻明葉、合唱：東京バッハ合唱団、
指揮：大村恵美子/松尾茂春(キラキラ星変奏曲)

月報 2024 年 5 月号 CONTENTS

- ・お誕生日おめでとうございます (尾形仁美) …p. 2
- ・アルザスから (遊馬 栄) / おたより (武内英三) …p. 3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [39] (大野博人) p. 4

様式：4声フーガ（およびフゲッタ）、2声カノン、パッヘルベルコラール様式、拍子のない朗誦調など。カノンでは主題を通奏低音に置いた上で別の主題を上方4度で模倣するもの、主題の変形を下方5度、下方4度、上方8度でそれぞれ模倣するものがあります。

和音：原曲から想像しにくい和音の連結、長調の旋律線への短調系の和音付与、等。

時間的シンメトリー：歌詞、音楽両方が対称、つまり前から歌っても後ろから歌っても同じになる。

主題のトランスフォーメーション：主題に対する「拡大縮小」「平行複製」「反転」。

・「拡大縮小」…主題の時間軸方向へ伸縮 - フーガ等での主題の拡大もこれに相当。

・「平行複製」…主題の高低あるいは時間軸方向への複製（フーガやカノンでの模倣に相当）。

・「反転」…3次元空間（XYZ）中のXY平面に、時間の進行がX方向になるように楽譜を置いた場合、X軸での反転（高低の逆転）、Y軸での反転（時間の逆転）、Z軸での回転（高低/時間両方の逆転）を施すこと。またこれらの変換結果と原主題、変換結果どうしを組み合わせる場合もあり。高低の逆転は、バッハを始めとするフーガ作品の第2展開部以降でお馴染みのものです。

◆歌詞——客観的な視点と「私」、「私たち」の視点

旧約聖書のイザヤ書と新約聖書の4つの福音書に基づき、イエス・キリストについて預言、誕生、公生涯、受難、復活まで、その足跡を断片的に辿りながら情景を綴っていきます。歌詞は客観的な視点での表現にとどまりますが、受難と復活については「私」「私たち」からの主観的な視点が加わります。

主に作曲者自身による日本語の歌詞ですが、ラテン語部分のみ、日本語との混在を試みた変奏もあります。

現代日本語での歌詞が陥りやすい“マニュアル”あるいは“報告書”のような文体とならないよう言葉を切り詰めた結果、歌詞が時に舌足らずであったり文法的な曖昧さを残す場合があり、文体も統一されていません。よりの確な歌詞のご提案があれば置き換えるつもりです。また他言語による訳詞あるいは聖書に沿った

創作歌詞によって歌われる可能性も視野に入れていきます。

音楽が、歌う人の母語に訳されることで豊かに生かされることは、これまで経験した日本語でのバッハ演奏を通して強く実感してきたことに他なりません。

6月の公演に足をお運びいただければ幸いです。



■満開のサクラ（撮影：千葉光雄・団員、撮れたて 2024/3/27）

大村恵美子先生

お誕生日おめでとうございます。

尾形 仁美（団員）

3月9日、この日はちょうど大村先生の93歳の誕生日だったので、その日の練習を終えた後、みんなで先生を囲んでお祝いをしました。

今回は苺のホールケーキを用意し、ろうそくを立てて、みんなでハッピーバースデーを歌ってお祝いしました。それはまるで家族とお祝いしているようなアットホームな雰囲気でも、とても楽しい時間を過ごすことができました。

またそれに加えて、お誕生祝いのミニコンサートも持たれました。田尻明葉さんのオルガンと土屋昌子さんのヴァイオリンの演奏で、お二人の息がピッタリと合い、優しい音色が荻窪教会の礼拝堂に響きました。みなさんと共にとても贅沢な時間を過ごすことができ感謝しています。

私が最初に東京バッハ合唱団を訪れたのも、2年前の大村先生のお誕生日のお祝いの日でした。まだその頃は新型コロナウイルスの感染拡大が続いていたので、ささやかなお祝いの時でしたが、それでも団員の皆さんが大村先生のお誕生日を心から祝福されていて、大村先生がみんなに愛されていることを感じました。

あれから丸2年が経ち、私は毎週本当に楽しく練習に通わせていただきました。新型コロナウイルスの感染拡大がいつまで続くのかわからない不安な日々でしたが、しかしここに来れば歌える、しかもバッハの曲が日本語で歌えることは、私が想像していたのをはるかに超えて、私の心と魂に喜びを与えてくれました。

また練習後の心地よい疲労感は、コロナで家に引きこもりがちだった私の体をもいやしてくれました。言葉ではなかなか伝えられない感謝の気持ちですが、大村先生と団員の皆さまに心より感謝しています。

どうぞこれからも大村先生のご健康が守られ、元氣にご指導をしてくださいますようお願いいたします。

お誕生日心よりおめでとうございます。



◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm



■スノードロップ (撮影：千葉光雄・団員、撮れたて 2024/4/6)

アルザスからのお便り (e-mail)

今日は聖金曜日、マタイ受難曲を聴いて…

遊馬 栄 (元団員)

2024年03月30日 (土) 03時37分
(メールの時刻は、日本時間)

大村恵美子様
前略、

在仏51年にもなってしまいました。3人の子供もすでに飛び立ち、妻ニコルと2人で毎日の Train, train [ルーチン、日常] を精一杯生きております。

([] の訳語は編集者、以下同様)

ストラスブールは変わってしまい、貴女がいらしたころ、私が住み始めた1973年ごろに比べたら、16世紀の歴史博物館のなかにヨーロッパ議事の革新、亀裂を陳列しているような街になりました。

私は車で10分ぐらいの森に囲まれた Illkirch Graffenstaden という郊外に住んでおります。ストラスブールには年に3回ほど行くくらいで Hermite [隠者] のような生活をしております。

大昔は Eglise Saint Guillaume [サン・ギョーム教会] のバッハ合唱団に在籍し René Mater 氏のもとで年に4回のコンサートのために練習を重ねたことが貴重な思い出になっております。勿論、東京バッハ合唱団で青春を過ごせたことは私の心の宝物です。

今日は Vendredi Saint [聖金曜日、受難日] でアルザスは祭日です。朝6時に起床しバッハの Passion selon Saint Mathieu [マタイ受難曲] を聴いて日課を始めました。思い出深い曲です。Saint Guillaume でも2度、東京でも1度、感激を味わった曲です。恵美子さんが情熱的に正確なタクトを振られる姿を想像します。

お元気でその灯で照らし続けてください。敬具

.....

2024年03月30日 (土) 09時39分

遊馬 栄さま

私を長い年月おぼえていて下さって、ありがとう！とても嬉しいです。

「人間」というのは、お互いに言葉をかわしあうとこ

ろが特徴の生きものですから、これからもまた、忘れないで、「生涯の友」でありつづけるように、試みましょう。

友は貴きかな！

東京、大村恵美子

.....

2024年03月30日 (土) 19時12分

大村恵美子様

お元気そうで嬉しく思います。

桜の開花もまじかでなにか新しいことを始めようという意欲が高まります。

私も《生涯の友》に相応しい心から出る《言葉》を発信できたらと願っております。

先ずはお身体を大切に楽しい毎日をお送りください。笑う門には福が来ると言いますから。遊馬

お・た・よ・り

武内 英三 (畏友、ご常連)

東京バッハ合唱団「月報」、家内の読後に楽しく拝見させて戴いております。

難曲とも思われるバッハを、日本人の心の表現に置き換えて発表されている舞台、まさに画期的な試みであり、後世に引き継がれる、偉大なる表現力と思われまます。

現在のこの世は、多様性とか不可思議な世相が蔓延しておりますが、初心貫徹、みなさん、ますますのご活躍をお祈り致します。

[編集部註：上の筆者は、往年のソプラノ団員、菅井のマリちゃんこと武内真理子さんのご夫君。最近の団員の方々には、毎回の定期演奏会でステージマネジメントをこなして下さっている武内真一氏のお父上、でお分かりでしょう]



■緑の中のサクラ (撮影：千葉光雄・団員、撮れたて 2024/4/8)

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [39]

時間の流れ



安曇野閑人 大野 博人

円か直線か。

時間の流れ方について、大きく分けて二つのイメージがある。季節や世代を経ながらつねに元に戻るようになるとまわり続けるか、あるいは過去から未来に向かってまっすぐ流れるか。

最近、読んだ本（真木悠介著「時間の比較社会学」）によると、それぞれに歴史的、社会的事情があって形成されたらしい。古代ギリシャでは時はめぐると思われていたが、宗教的に終末や救済の考えが出てくると時間はそれに向かって流れるという見方が強まったとか。そんなイメージが広がる前の原始的な社会では、未来や時間という概念さえあいまいなところもあったそうだ。そうすると、ちょっと想像するのもむずかしい。

私たちは近代社会に暮らしている。ここでは時間は直線的に流れるというイメージが主流だ。後戻りしない。だからいつも先のことを考える。仕事の予定を立て、休暇の計画をし、試験やレッスンの準備をする。進学や就職に懸命になったり、結婚や昇進の心配をしたりする。将来への希望と不安が、今の自分の心をいつも支配する。

自分もまったくそうだった。とくに都会暮らしや会社勤めが日々のベースだったころ、時間の流れは直線的で、しかもとても速かった。

考えてみれば、新聞記者は時間に追われるのが仕事みたいなものだ。どんどん過ぎていく時間に完全に左右されていた。毎日かならず締め切りがくる。それに向けて取材と執筆を急ぐ。遅れることは負けること。直線コースを走り続けるような日々。

だいたい「ニュース」とは「新しいこと」である。書くのは「昨日とちがう今日、今日とちがう明日」だ。「昨日と同じ今日、今日と同じ明日」はニュースにならない。ふり返ったり、立ち止まったりしないで、時間から振り切られないように駆ける。過去の話調べるにしても、やって来そうな将来の問題を予想したり、それに備えたりするためだ。

それが退職し安曇野に移住して一変した。忙しい仕事のリズムから距離を置いただけで、時間は必ずしも直線ではなくなった。円に近くなった。

とくに春の到来のころはそんな気分だ。雪が消えるとクロッカスが風景に鮮やかな黄、紫、白などの色彩をもたらす。続いて木々が緑を帯び始める。ウグイスなどの野鳥のさえずりが雑木林にこだまする。植物も野鳥も虫も、前の年と同じではないけれど、「戻ってき

た」と感じる。去った時間が戻ってくる。時はめぐる。それどころか雑木林の前にぼうっとしていると時間が経つこと自体を忘れる。

もちろん都会から離れても、いろいろと予定は入る。音楽仲間との練習やコンサート、畑仕事の段取りなどカレンダーや時計に沿った行動をしなければならない場面はある。けれども、会社勤めをしていたときほど、追われている感じはしない。

本では、時計やカレンダーという均一な尺度が確立されてからは、時間の速度も同じになった、ともある。時計ができたおかげで、人はより時間に追われるようになった。たくさんの相手と歩調を合わせなければならない。自分だけのリズムで動くことがむずかしくなる。

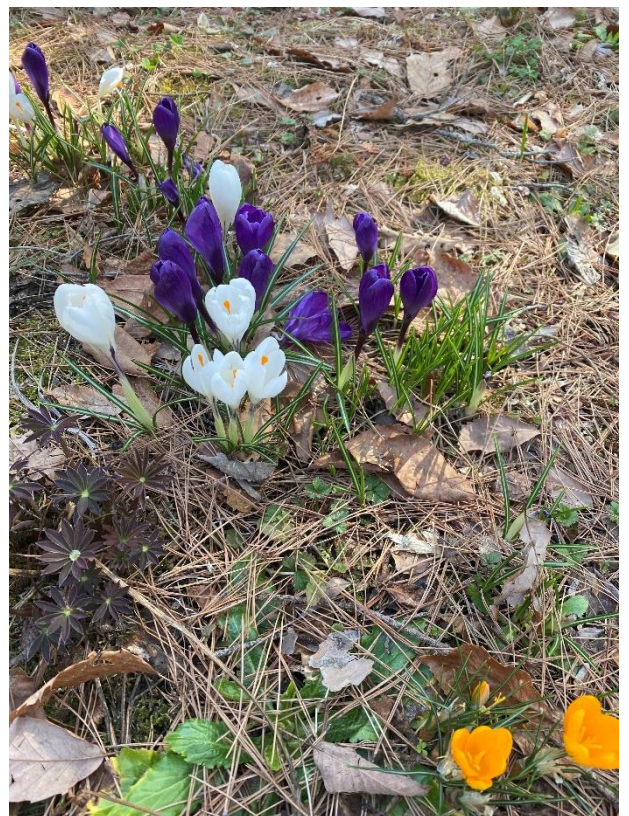
でも、その一方で、たくさんの人が遠く離れていても足並みをそろえて動くことができるようになったともいえる。音楽でも、四分音符や八分音符という「定量音符」が発達して、「座標軸」ができたから、複雑な多声音楽が可能になりバッハのような対位法の「超大家」の登場にもつながったと、書いてあった。

なるほどね。それなら時間の近代化もすばらしい。

と思ったとたん、音楽仲間とバッハのフーガを合わせようとしたときの記憶がよみがえった。みんなバラバラのテンポで演奏するからアンサンブルがちっとも合わなかった。「定量音符」がぜんぜん「座標軸」になっていない。時間の「均一な尺度」なんて、どこ吹く風。

アマチュア音楽家は、簡単に近代化などしないのだ。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）



■春とともにまた戻ってきたクロッカス（写真提供・筆者）